

茗溪学園 中学校・高等学校

“Study Skills を身につけさせる教育” その8

教務部長 田代 淳一

茗溪学園流 Study Skills の高次レベルに『疑問点の解決』『疑問点・解決事項の整理』があります。

Skill 項目としては「得られた資料の階層整理」「結果の分析と総合」「リポートの表現形式」「リポート表現の重要点」です。知的 Motivation から抱いた疑問点を調査し、討論しながら解決してきた情報を整理しリポートに表現していく、高次元の Skill です。もちろん、茗溪 Study Skills は6年間のスパイラルですから、この Skill も低学年から緩やかに始まります。

高校2年の個人課題研究

茗溪 Study Skills の最終段階、高校2年の個人課題研究の私が担当した生徒の例の紹介の続きです。本校生徒の進学大学は、年度によって若干異なりますが文科系5割、理数系4割強、体育芸術系1割弱という割合です。編集長の松本氏から文科系の事例を紹介するように依頼されましたので、予定を変更してお話します。

D 君の場合

D 君は中高一貫校の本校では少数派の高校入学生（約220人内部進学生に対し約30人の高校入学生がいます。入学後は内部進学生と完全に混合します）でした。

D 君は私に心理学をテーマにしたいと言ってきました。この、高校1年末という年頃は人間の心に関心がいく年齢でもあり、結構心理学をテーマに選ぶ生徒がいて、こういう生徒はだいたい人間関係に悩み自分や他人の心を知りたいという動機を持つ生徒がほとんどです。

しかしD 君が言い出したのは「認知心理学をやりたい」ということでした。大学の教職課程でピアジェやブルナーに痛い目にあった私自身の経験を思い出し、「あんなわけのわからない学問はやめた方がいい。どうしてもやるなら、私は研究方法しか支援できないから内容理解は独学でやってくれ。」と情けない申し渡しに、「それでいいです。自分で理解します。」と気合の入ったスタートを切りました。その言葉どおり彼の読書力はすさまじく、記憶のメカニズムに関する専門書を片端から読破、エビングハウスやバートレットのスキーマ理論を理解し、アトキンソンとシフリンの二重貯蔵モデルやバドリーの作動記憶モデルの問題点を独自に考察し、研究開始3ヶ月後には何と自分なりの記憶モデルを提案し

てしまいました。

自信満々の彼は、この分野では有名な筑波大学の太田教授にこの提案を見せたいと言い出し、渋る私に公文書を書かせ意気揚々と訪問してきました。私の予想に反して（私に見る目が無かったということですが）、太田教授から絶賛され貴重な文献もいただいて帰ってきた彼はすっかり筑波大学に進学し太田教授の元で研究することに決めていました。しかし、実は彼は理系を選択していて、筑波大学人間学類は文系なのです。この問題を、彼はAC入試（筑波大学流のAO入試）に挑戦するという方法でクリアしました。この入試は小論文と面接の自己推薦風の入試で、彼は自分の論文「認知心理学的視点に基づく記憶システム」を抱えて乗り込み、堂々と自己アピールし合格していました。

彼は高校入学生ですから、茗溪流 Study Skills は1年しか体験せずにこの研究に手をつけたわけですが、もともと読書家で調べごとが好きだったため違和感なく全力で取り組めたのだと感じています。

田代 淳一

たしろ じゅんいち

茗溪学園中学・高校 教務部長



化学の教師です。茗溪学園では前向きで明るく逞しく積極的な青年が育っています。

「有名大学に行きたいから勉強する」のではなく、「中学・高校時代にいろいろな事に挑戦し、失敗し、考え、自分を探して、自分で自分の将来を見つけ、自分で歩いていく。その方向が地球を救い、人類の未来を拓く方向であってほしい。」そう考え、支援するのが茗溪学園の教員の役割です。

海外生・帰国生が自分の力で自分の未来を切り拓いてきた経験はここで開花します。これまでたくさんの帰国生が、夢を追いながら進んでいく姿を見て応援してきました。

よろしくお願いします。